

仕方

松島和志

食堂で、私はスープを配分する。一皿に、二回すくう。スープが残り少なくなつて、一度にすくえる量が減つて、底にあたる金属の音が鳴りだすと、一皿分には三回だ。つまり、ある労働の仕方では働くのではない。ある労働の仕方が働くのだ。風がカーテンに姿を与えるように、仕方は私に姿を貸す。ある仕方が無ければ、別の仕方が私を膨らませ、立たせ、せき立て、要らぬことを言わせる。私と私の言っていることの隙間に、苔が這う。寝床で、私は咳の仕方を体得する。するべき深さと回数を心得る。うまくやっていくほかないのだ。背中の熱の逃し方も知る。隙を見て、嘔吐を試みる彼の倒れる上体を、両肩の二点で戻す。その繰り返しの中で、彼は私を上回るための新しい手段を採らない。そこには礼節のような詩学がある。祈りの時に目を瞑らせるのは、祈る唇のうつくしさを逃がすためかもしれないが、ただ口にするだけでよい祈りの言葉はもはや物であつて、仕方とは存在することのにじみである。睫毛の上に塵がつもっていく。そのうるささ、漂流する重み。